

修士論文（要旨）

2017年1月

大学生における自己愛傾向とソーシャルサポートの入手・提供の互恵性
および感情状態との関連について

指導 井上 直子 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
215J4007
上郎 慶典

Master's Thesis (Abstract)
January 2017

The Relationship among Narcissistic Personality, Reciprocity of Giving and Receiving
of Social Support, and the Emotional States of University Students

Koro Yoshinori
215J4007
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

第1章. 問題の背景と所在 1
第2章. 目的 1
第3章. 方法 1
第4章. 結果および考察 1-2

引用文献

第1章. 問題の背景と所在

青年期は、自己愛の高まる時期といわれている（小此木，1981）。近年の自己愛研究では、自己愛傾向を「誇大型」と「過敏型」の2類型から捉える立場が主流となっている。これら自己愛傾向の対人関係上の特徴は、親密な人間関係の形成を阻害することにつながると考えられる。親密な人間関係を築くことができなければ、ソーシャルサポートを得ることが困難になり、精神的健康が低下すると考えられる。

ソーシャルサポートの入手と提供のバランスが取れている状態ではポジティブな感情、バランスが取れていない状態ではネガティブな感情がもたらされ、結果として精神的な健康に影響を及ぼすとされている（福岡，2003；周・深田，1996；佐々木・島田，2000）。

以上のことから、対人関係における援助のやりとり、つまりソーシャルサポートの入手ー提供という視点から自己愛傾向を取り上げることは、日本の青年期の心性を理解し、自己愛傾向の高い個人への効果的な介入方策を考えるにあたって有意義であると考えられる。

第2章. 目的

本研究では、大学生を対象に自己愛傾向とソーシャルサポートの入手ー提供の互惠性および感情状態との関連について性差もふまえて検討することを目的とする。

第3章. 方法

首都圏の私立大学の学生のうち、青年期に相当する18～24歳の男女を対象に質問紙調査を行った。質問紙の内容は以下のように構成されている。

- (1) フェイスシート
- (2) ソーシャルサポートの入手と提供
- (3) ソーシャルサポート関係における感情状態
- (4) 自己愛傾向
- (5) 年齢と性別の記入欄

第4章. 結果および考察

首都圏私立大学の講義を受講している大学生男女720名に調査用紙を配布し、557名（回収率80%）から回答を得た。そのうち、未回答のものなどを除き、最終的に男性172名、女性274名、計446名を分析の対象とした。分析対象者の平均年齢は全体20.09歳（SD=1.33）、男性19.94歳（SD=1.41）、女性20.19歳（SD=1.26）であった。

NPI-SとNVS短縮版の2つをシャッフルした全50項目を因子分析にかけたところ、他者の言動や反応に敏感で批判や軽視に傷つきやすいタイプの自己愛を表している「過敏型自己愛」因子と、他者の感情や反応に鈍感で周囲を気にかけない誇大性の自己愛を表している「誇大型自己愛」因子の2因子が抽出された。

自己愛傾向、ソーシャルサポート、感情状態の各指標に性差があるかどうかを確認するため、 t 検定を行った。その結果、自己愛傾向に関しては、女性のほうが男性よりも「過敏型自己愛」が高く（ $t(444) = -3.00, p < .01$ ）、男性の方が女性よりも「誇大型自己愛」が高かった（ $t(444) = 3.26, p < .01$ ）。これらの結果は先行研究と一致していると考えられる（小塩，1998；上地・宮下，2005）。ソーシャルサポートに関しては、「入手」（ $t(444)$

= -5.65, $p < .01$) と「提供」($t(444) = -4.75, p < .01$) とともに女性の方が男性よりも高く、これらも結果も先行研究の結果と一致するものと考えられる(福岡, 1999, 2003)。

自己愛傾向とソーシャルサポートの入手と提供のやりとりの量を表す「入手+提供」、互恵性を表す「入手-提供」についてカイ二乗検定を行ったところ、過敏群において男女で異なる結果が示された。男性では、過敏群におけるソーシャルサポートのやりとりの量($\chi^2(6) = 8.87, n.s.$)、互恵性($\chi^2(6) = 6.83, n.s.$)の人数に差は認められなかった。一方、女性では、過敏群は他の群に比べて、「入手+提供」低群の人数が多い傾向が示された($\chi^2(6) = 11.29, p < .10$)。また過敏群は他の群よりも「入手>提供」群の人数が多く、「入手=提供」群が少ないことが明らかとなった($\chi^2(6) = 16.80, p < .05$)。このことから、女性の過敏群は他の群に比べてソーシャルサポートの互恵性が保たれている人が少なく、また他の群に比べて提供が少なく入手の多い過剰利得の状態の人が多くが示唆された。過敏型自己愛傾向の高い人は、不安や情動などを自分で調節・緩和する力が弱く、他者に調節・緩和してもらおうとする傾向や他者からの特別な配慮や慰めを求める傾向があると指摘されており(上地・宮下, 2005, 2009)、また、対人依存型対処を採用する傾向が高く、他者からの評価に過敏であり、否定的な評価を不安に感じつつも、他者からのサポートを強く望む傾向があると指摘されている(前田・岩永・生和, 2005)。このことから、過敏型自己愛傾向の高い人は日常生活において、友人からサポートしてもらえると期待する傾向があり、サポートをしてもらえるとと思っている人が多い可能性や、他者から配慮やサポートをしてもらうことを求めるため、他者にしてあげるという意識が薄くなっているのではないかと考えられる。

自己愛傾向と感情状態の相関係数を算出したところ、「心理的負債感」では、男女ともに「過敏型自己愛」とほとんど相関は認められず(男性: $r = .16$, 女性: $r = .17, n.s.$)、「過敏型自己愛」と「心理的負債感」の間にはほとんど関連がないことが示唆された。また、「満足感」では、男性において、「過敏型自己愛」と「満足感」の間に弱い正の相関が認められ($r = .21, p < .01$)、女性では、相関は認められなかった($r = .02, n.s.$)。

自己愛傾向と性別を独立変数、感情状態を従属変数とした2要因分散分析を行った結果、「心理的負債感」では自己愛傾向において主効果は認められたものの($F(3, 170) = 3.34, p < .05$)、多重比較による過敏群と他の群の間に有意な差は認められなかった。この結果に関して、ソーシャルサポートの入手と提供のやりとりの総量を鑑みると、本研究における過敏群は他の群に比べて友人関係におけるソーシャルサポートの入手と提供のやりとりが少ない人が多いため、感情状態が生じにくい状態になっていた可能性があると考えられる。また、過敏型自己愛傾向の高い人は、友人からサポートしてもらえることを当然のことと考えており、友人に対して恥ずかしさ申し訳なさを感じていない可能性があると考えられる。

引用文献

- 福岡欣治. (2003). ソーシャル・サポートの互惠性に関する考察—認知レベルと実行レベルの区別に焦点を当てて—. 行動科学, 42, (2), 103-108.
- 上地雄一郎, 宮下一博. (2005). コフートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, 14, (1), 80-91.
- 上地雄一郎, 宮下一博. (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性. パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 前田高幸, 岩永誠, 生和秀敏. (2005). 自己愛傾向が行動的回避に及ぼす影響についての検討. 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 31, 31-41.
- 小此木啓吾. (1981). 自己愛人間. 朝日新聞社.
- 佐々木新, 島田修. (2000). 大学生におけるソーシャルサポートの互惠性と自尊心との関係. 川崎医療福祉学会誌, 10, (2), 249-254.
- 周玉慧, 深田博己. (1996). ソーシャル・サポートの互惠性が青年の心身の健康に及ぼす影響. 心理學研究 67, (1), 33-41.